令和５年度　学校評価総括表　伊丹市立わかばこども園

教育・保育目標	あふれる笑顔、つながる心、たくましく育つわかば
重点目標	人とのつながりを大切にし、心も体もたくましさを備えた笑顔のあふれる子どもを育成する

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	学びを大切にした保育の実践	主体性をはぐくむ遊び環境	・毎月の職員研修において、園庭環境についての見直しを全職員で行い、共通認識するとともに、子ども理解を深める。 ・学年や棟で週に１回以上話し合いをし、子どもが自ら遊び､遊び込むことができる環境作りを行う。 ・月１回以上の乳児・幼児会議や、各リーダー会議において、保育内容の意見交換をする。 ・自園の実態に応じた教育課程の編成ができるよう、期ごとに１回教育課程の見直しを行う。	・保護者アンケートにおいて①「子どもは楽しく園生活を送っている。」②子ども園は、子どもの発達や興味関心に応じた保育を行い、子どもの意欲や主体性が育まれるように努めている。」と回答した割合がそれぞれ８５％以上になる。 ・主体的に遊ぶ姿を保護者に月に２回以上、発信する。 ・子どもの育ちや学びを月に１回以上、複数クラスの職員で深くよみとり、主体性を大切にした保育展開が計画的に行える。 ・自園の実態に応じた教育課程を、各学年や全職員で編成や見直しをした上での教育保育を行える。	A	・保護者アンケートにおいて①②ともに肯定的な回答の割合がそれぞれ８５％以上であった。 ・主体的に遊ぶ姿の発信は、幼児も乳児も月に２回以上行うことができた。 ・毎月、会議を定期的に設けて保育の見直しを行ったことにより、子どもの姿を深く話し合い、再構成することができた。 ・学期や月、子どもの発達に合わせてねらいに基づいた保育を実践している。教育課程に記している内容に沿い、子どもの姿に応じた環境構成や変更を適時行っている。しかし、教育課程の即時的な見直しが出来ていないことが課題である。	・職員間での共通理解ができるよう、定期的な会議や研修を引き続き行い、語りあう場を作る。 ・子どもの実態に合っているか、毎学期に一度は教育課程を見直す機会をもつ。	・主体性を育むための具体的な方策について知りたいです。 ・子どもの実態に応じて教育課程の見直しはとても大切なので行っていってもらいたい。
		自然環境の活用	・園庭の木や草花に興味や関心がもてるような表示や写真を作成し、子どもが見やすい場所に配置する。 ・樹木や園芸植物、野菜の生育状況に応じて定期的に水やりや追肥を行う。 ・職員間で自然環境の活用について話し合う機会を作る。 ・生き物の発見や観察ができるようビオトープの手入れを定期的に行う。	・子どもが葉や花の色の美しさに心を動かし、季節によって変化する自然物を遊びに取り入れる姿が見られる。 ・栽培物の生長過程に興味や関心をもって世話をする姿が見られ、収穫の喜びを味わう。 ・保護者アンケートにおいて「こども園は、子どもの豊かな感性を育むための自然環境を工夫して整えている。」と回答した割合が９０％になる。 ・月に 1 回以上職員で自然環境の活用について話し合い環境の再構成を行う。また、定期的にビオトープの水質を点検したり藻を取る等の掃除をしたりする。	B	・町の先生の話を聞き、子どもが季節の虫やビオトープに生息する生き物の生態の話やビオトープの管理方法について知るきっかけになり、より興味や関心がもてた。 ・保護者アンケートにおいて、85%以上の肯定的な回答を得ることができた。 ・保育者が野菜や花等の栽培計画を年間通して行ったことで、季節ごとに栽培する野菜の種類の違いに気づいたり、収穫の喜びを味わったりする子が増えた。また、栽培物の生長過程に興味や関心をもち、土づくりや水やり等の世話をする姿が見られた。 ・保育者間で栽培に関する情報交換をしたり畝づくりや追肥を適切に行ったりしたことで、子どもたちは、栽培物の実りや収穫の喜びを味わうことが出来た。	・園の土壌や日照条件などを子ども達の栽培活動に活かせるように、実らない栽培物において管理の方法や種まき又は苗植えの時期を検討する。また、自然環境について考える機会を定期的に作る。(3, 4か月に１度)	・少々難しいかもしれませんが、なぜ栽培物が上手く実らなかったのかを子ども達と共有し、考えさすのも良いのではないかと思います。 ・よい取り組みなのでこれからも継続していってもらいたい。
豊かな心・健やかな体	自分も人も大切にする子どもの育成	互いのよさを認め合う保育	・自尊感情が高まるよう、個々のよさを大切にし、子どもの気持ちや考え、行動等を尊重した保育を実践する。 ・誕生会や誕生日を通して命の大切さを感じたり、自分は大切にされていると感じられたりするよう、一人一人に愛情深くかかわる。 ・異年齢、同年齢等、様々な交流ができる場を設けるとともに、普段の遊びの中で互いに思いやりや親しみがもてるようにしていく。 ・年間を通して自然物や栽培物・花等の採集や飼育観察を通して命の大切さが感じられるようにする。 ・保育者自身の道徳性を常に振り返り、人権意識を高める。 ・人権に関するブロック研修、園内研修、保護者研修をそれぞれ年１回以上行う。	・保護者アンケートにおいて、①「保育者は、子どもに愛情深くかかわっている。」②「こども園は、子どもに自分を大切にすることや、他の人への思いやりが育まれるよう教育・保育に取り組んでいる。」と回答した割合がそれぞれ９０％以上になる。 ・異年齢、同年齢等、様々な関わり合いの中で、互いに思いやりや親しみをもって遊んでいる姿が見られる。 ・季節や発達に応じた育ちの中で、栽培している野菜や花の生長、花の美しさを感じたり､虫や飼育している生き物に愛情をもって関わったりする姿が見られる。 ・個々の子どもの育ちについて職員間で情報共有を行い､保育計画の見直しとよりよい実践が行えるよう､クラスや学年での会議を月１回以上行い、人権尊重の視点での子どもの育ちや、保育について話し合う。 ・講師を招聘する研修を年１回以上行うとともに、研修に参加したり人権に関するＤＶＤを視聴したりして、その内容を協議し人権意識を高める。	B	・保護者アンケートにおいて、①は９８．２%、②は９８．７%の肯定的な意見があった。 ・職員間で異年齢の関わりにおける子どもの育ちについて共有し、意識を高めていったことで､乳幼児が関わって遊ぶ機会が増えた。しかし、異年齢交流を日常の保育に取り入れていく頻度についてはクラスによって差が生じていた。 ・子どもたちの身近な場所で野菜や花を育てられるようにしたことで、自然に興味関心が高まっていった。また、植物や野菜を採集したり収穫したりすることや、生き物の飼育をする中で、元気に育ってほしいという思いをもち、命の大切さを感じる姿につながった。 ・講師を招聘する研修や人権研修を行い、人権尊重の視点での保育について、職員で話す機会がもてた。日頃の保育の中で保育者がどの様な声かけをすればよいかなど話し合うことができた。また、保護者より「男性保育士による女児のシャワー・着替えを控えてほしい」という声があり、職員間で意見交換を行った。職員間でも意見が様々であり、差別や偏見になっていないか等、人権意識を見直すことが課題である。	･職員同士で共通理解して､計画的かつ意識的に異年齢での関わりをもてるようにしていく。 ・男女差別、ジェンダー問題等、様々な人権問題について職員研修や話し合いを行い、人権意識を見直していく。	・こども園の特性を生かした異年齢間交流の取り組みは評価できます。まだまだ時代の流れに追い付いていない保護者がいる事は事実で、時間はかかると思いますが今後の課題と考えます。 ・人権意識向上の為の研修は継続して行っていく必要がある。 ・保護者にもしっかり伝わるくらい、愛情深く子ども達に関わることができていて素晴らしい。
		健康な心と体を育む	・食べることや食材に興味をもてるよう、栽培活動や旬の食材に関する掲示と給食のメニュー掲示をしたり、年齢に応じた食体験を実施したりする。 ・自らの健康や心身に関心をもち、生活習慣を意識できるよう視覚教材等の環境を作る。 ･「ほけんの話」などの保健指導を季節や発達段階に応じて適時行う。 ・子どもが自ら体を動かして遊びたくなるよう、室内外の環境や教材･遊具を工夫しながら活用する。	・保護者アンケートにおいて、①「子どもは、こども園の給食を楽しみにしている。」と回答した割合が８０％以上になる。 ・保護者アンケートにおいて、②「保育者は、子どもの基本的生活習慣が身に付くように、個々に応じて関わっている。」③「子どもは、こども園での遊びを通して体を動かして遊ぶことが好きになったと感じる。」と回答した割合がそれぞれ８５％以上になる。 ・保健、栽培、給食など、各担当職員で連携を図り、健康や食育に関する教材作成や指導を行う。 ･発達段階に応じた体を動かす遊びを職員間で協議し、室内外に構成をする。	A	・保護者アンケート①において、85%以上の肯定的な意見を得ることができた。 ・保護者アンケートにおいて、②③共に 90%以上の肯定的な意見を得ることができた。 ・子どもたちがその時期に必要な生活習慣を身に付けられるように、月に１回の保健指導では視覚教材や手遊び等、年齢に応じた内容で指導を行った。 ・収穫物を食べる際には保護者にも知らせ、家庭でも共通の話題ができるようにした。 ・園庭だけでなく遊戯室やプレイルームを使い発達段階や気候に応じて、投げる、跳ぶ、つかまる、引っ張る、走る等の体を動かす遊びを構成した。その際、子どもの姿から職員間で協議や振り返りを行い、環境構成の再構築を行った。 ・タイヤや縄、ゴム等複数の遊び方ができるものを用意したことで子どもが主体的に遊んでいた。	･園庭環境､室内環境共に学年を超えて話し合いを行い、子どもの姿から適宜見直しを行うことで子どもたちが体を動かす心地良さや満足感を味わえるようにし、育ちを支えていく。	・園と家庭で共通の話題作りを行っていることは非常に良い事と思います。 ・集団で遊ぶ経験は、社会性を育む上でも大切であり、ぜひ取り組んでいただきたい。

開かれ信頼される学校園	安心・安全な園づくり	危機管理の徹底	・アレルギー児、与薬対応、避難訓練マニュアル、年間計画を作成し、全職員で共通認識を行う。 ・リスクマップの見直しを行う。また、月に２回、複数職員で安全点検を実施し、危険個所発見時は全職員に周知し、速やかに改善する。 ・不審者対応について、普段から園外の一般の方に挨拶をし、地域全体で見守りと警戒に繋げる。 ・一斉メールを活用し、緊急時に子どもを保護者へ引き渡す訓練を年１回行う。 ・保育の中で安全管理について職員で話し合い、発達段階に応じた指導を適時行う。	・アレルギー児の成分表が月初めまでに揃っているか確認する。 ・全職員が共通理解できるよう、マニュアルを見直す。アレルギー児には毎日、職員間で成分表を確認し、個々の状態に即して提供できるようにする。 ・不審者対応訓練での警察の方からの指導や助言を職員間で共有し、対応できるようにする。 ・月１回、火災や地震等を想定した避難訓練を実施し、反省や課題を踏まえ、その都度マニュアルや計画を見直していく。 ・園の生活環境に潜むリスクについて共通認識し、破損や危険個所の改善が迅速に対応できる。 ・保護者アンケートにおいて「こども園は、災害等の発生に備えた避難訓練や施設・遊具等の安全点検を定期的に実施し、子どもの安全に関して適切な対応を図っている。」と回答した割合が９０％以上になる。 ・発達段階に応じて安全な過ごし方や遊び方が身につくようになる。	A	・不審者対応として、日頃から保護者名札の確認をし、施錠時にはインターフォンでクラスと名前を確認してから園内に入ってもらうように徹底した。 ・不審者対応について警察の方の助言により、複数人で対応するよう等周知し、職員の危機意識を高めた。 ・乳幼児関係なく職員間で子どもの所在確認・安全等を確認しあった。 ・保護者アンケートにおいて肯定的であると回答した割合が９０％以上である。 ・リスクマップの見直しを行うたびに伝達事項が増えて見づらい点があるので、わかりやすいように改善する。 ・はさみ等の道具の使用方法について、安全な使い方は身につきつつあるが、怪我の事例が数件あった。 ・アレルギー児・与薬対応や避難訓練などの各種マニュアルについては、目につきやすい場所に保管場所を決めて情報共有に努めている。危機意識をもって全職員が対応できるようにしていく。	・乳幼児間で園庭での運動遊び、室内で道具を使った製作等、活動内容を共有し、安全に過ごせるようにする。 ・リスクマップの内容を場所ごとにわけてわかりやすく整理し、見やすくする。 ・引き続き道具の扱い方・危険性について知らせていくとともに、保育者もより意識して使用時に見守っていく。	・小さい子ども達の活動の中では危険なことが起こりやすいと思うが、危機意識を高めたことが成果につながっている。 ・既に行われているかもしれませんが危機管理は項目が多いため、項目毎にグループ分けし、それぞれリーダーを中心に計画立案、園の全職員で共有・実施する方法もありかと思います。
		園情報の発信	・静止画像や動画、文章を添えたものなど様々な方法で保護者へ教育保育の可視化を行う。 ・HP を用いて地域へ園の情報を発信する。 ・保護者にとってわかりやすい情報が発信されるように職員研修を行う。	・静止画像と動画を含めて週１回以上、Google クラスルームを更新する。 ・保護者アンケートにおいて、①「こども園は、こども園の情報を園だよりやクラスだより、連絡帳、写真掲示、ホームページ等を通じてわかりやすく保護者に伝えている。」②「わかばこども園ガイドで知らせている教育・保育目標は適切である。」と回答した割合がそれぞれ９０％以上になる。 ・週１回程度 HP を更新し、日頃の保育や職員研修など園での取り組みを発信する。 ・発信する前に複数の職員で見合い、読み手にとって見やすい内容であるか検討してから発信する。	A	・必要に応じて Google クラスルームの更新頻度を増やし、保育内容の発信を行ったことで保護者アンケート①において、よくあてはまる、ややあてはまると回答した割合がそれぞれ９０％以上であった。 ・発信前に、読み手にとって見やすい内容であるか、伝えたい内容が記されているかについて、管理職を含めた複数の職員で見合い、内容の検討を行った。 ・静止画は頻繁に更新していたが、動画の更新頻度が低かった。	・日頃の子どもの遊びの様子や、子どもの育ちがより保護者に伝わるように、撮影・編集方法を検討する。	・地域ではＨＰなどプル型の情報発信が広がりにくいので、園だよりにＨＰのＱＲコードを記載し、プル型に誘導する方法もあるかと思います。 ・読み手を意識した発信ができていて、とても良い。
	地域に根ざした園づくり 園運営の推進	子育ての支援事業	・保護者対象の保育参観を２カ月に１回以上、学級懇談会を学期に１回、個人懇談を年２回実施する。 ・保護者を対象に育児相談を適時、実施する。 ・地域の子育て家庭を対象に施設見学、育児相談を適時実施する。	・保育参観、学級懇談会に７割以上の保護者が参加し、子どもの育ちや学びを共有する。 ・保護者アンケートにおいて、「こども園は、『子どもが心身ともに健やかに成長してほしい』という保護者の願いに応えている。」と回答した割合が８０％以上になる。 ・施設見学希望者に対し、定期的に見学会を開催し実施する。	A	・保育参観、学級懇談会、個人懇談を計画通り年間数回実施し、子どもの育ちや学びを共有することが出来た。また、園内研修の講義で保護者が参加できる機会を作ったことで、子どもの主体性に関する保護者啓発にも繋がった。 ・保護者アンケートにおいて、よくあてはまる、ややあてはまると回答した割合が合わせて９０％以上であった。 ・施設見学希望者に対し、定期的に見学会を開催していることで、本園を知ってもらうことができた。	・引き続き保護者啓発等に努める。 ・保護者と密に連携しながら、来年度以降も育ちや学びをこまめに共有できる機会を設ける。	・わかばこども園は人気が高く、入園するのが難しいと聞きます。施設そのものだけではなく、見学者に対する対応の成果と思います。
		にじいろ保育 拠点園の推進	・にじいろ広場を年齢別に開催し、小集団で体を動かす遊び等を通して一人一人の発達への支援を図る。 ・にじいろ保育の拠点園として、インクルーシブ教育・保育について、ブロック内の各園所へ情報発信を行う。 ・インクルーシブ教育について職員研修を行い、専門性を磨き、また保護者研修会を通して、推進と情報発信をする。	・にじいろ広場開催に向けて、担当者同士で月１回、参加園の子どもの実態等を丁寧に話したり、開催日に次回についての話し合いを行ったりし、子どもの発達の実態に即した内容になるように検討する。 ・拠点園として、遊具や書籍の貸出リストをＨＰに掲載し、ブロック内の園に大型遊具、教材、書籍の貸出をする。また、にじいろ広場や研修について広く周知できるように、年４回以上『にじいろだより』を活用し、情報発信をする。 ・年に２回以上、園内研修会、保護者研修会を計画し、実施する。園内研修の実施方法を工夫し、様々な保育者が参加し、専門性を磨き資質向上につながるようにする。	C	・にじいろ広場実施後、次回に活かすための検討事項などを話し合い、日案と一緒に記録し、関係職員皆で共有することで子どもの実態に即した内容で開催することができた。 ・貸出リストをＨＰに掲載するところまで至らなかった。貸し出し本のＰＯＰ掲示をすることで貸出件数は以前より上がった。 ・『にじいろだより』は年４回発行できたが、タイムリーな内容とはいかなかったので次年度は保護者の関心に即した時期に発行できるようにする。 ・にじいろ保育対象の保護者向けの研修会は予定通り実施でき、研修会アンケートから好評であったことが伺えた。職員の園内研修については、年間を通した計画ではなかったため、実施することが出来なかった。	・拠点園として、貸出本や遊具をブロック内に周知して活用してもらうために、期限を決めて早急にリストを作成しＨＰに掲載する。 ・保護者の関心に即したものや、インクルーシブ教育への理解を啓発するものを発信するために、配布の時期と内容を年度当初に計画を立てる。 ・職員の資質向上のために園内研修の年間計画を立て実施していく。	・インクルーシブ教育・保育について、ぜひとも情報を発信していってほしい。

学校関係者評価総括
日々、子どもたちの姿を職員間で共通理解しながら、よりよい保育を目指している成果が表れている。
目標通り達成できたとして全体評価はＢである。

次年度に向けた重点的な改善点
開園から４年が経過し教育保育活動の方向性が明確化しつつある。前年踏襲になっていないかを見直しながら、子どもの実態に即して常に保育改善を図っていく。

自己評価の基準　Ａ：目標を上回った　Ｂ：目標どおりに達成できた　Ｃ：目標をやや下回った　Ｄ：目標を大きく下回った